



# BSR 通信

BSR 推進室ニュースレター第 28 号

平成 28 年 7 月 10 日

発行：大正大学 BSR 推進室

〒170-8470 東京都豊島区西巣鴨 3-20-1

03-3918-7311 (代)

bsr\_lab@mail.tais.ac.jp

## 「伝統の発見」に思いを馳せて

心理社会学部人間科学科 教授 張 江 洋 直

本学に赴任してすでに 3 年が経つ。それがずいぶんと短く感じられるのは何故だろうか。ところで、それ以前に勤務していたキリスト教系大学ではクリスマス期に聞こえてくる荘厳なパイプオルガンの幾重もの音色以外には、その宗教性をさして意識することはなかった。そのためか、赴任前には仏教系大学であっても、そこに大きな変化はないものと考えていた。だが、本学における初めての入学式で奏でられた雅楽には、我が寝ぼけ眼を啓かされた。それは決して「上級者」のものではないのだが、それでも、あるいはそれ故にこそ、その音色はまさに〈現在に活きている伝統〉を眼前に呈示されるものとしてあった。

私が敗戦後の「民主主義と進歩主義」との只中で成長したためだろうか、「伝統」とは暗黙裡に〈離脱すべき場〉と非主題的に感じられていたのかもしれない。そのために、青年期に出会った『真理と方法』（H-G.ガダマー）には心底、驚かされた。そこで示された、どこかで何がしか〈疑わしき伝統〉として意識されるのであればそもそも〈伝統の

獲得という課題〉が生起しないという指摘を、自らの社会学的方法として重ね合わせることができないか、この焦点の定まらぬ確信から浅学の身を省みることのない悪戦苦闘が続いてしまった。その後、『創られた伝統』（E.ホブズボウム & T.レンジャー）によって、「伝統」への実証的なまなざしの必要性も痛感させられるに至る。

そうしたなかで、私の若き研究仲間が呈示した「近代仏教」（大谷栄一）には再度、眼を啓かされた。そこで仏教は、私の知る輪郭とは明らかに異なり、明治期の青年たちによって〈発見された伝統〉として存立していた。本学に赴任し、巣鴨キャンパスのそこそこで〈形式へと昇華された伝統の継承〉に日常的に出会う機会も多い。じつはたんなる「仏教オンチ」であるにも拘わらず、その度に、かつて〈発見された伝統〉がこのように〈現在に活きていること〉、それが日常という奇跡と同じく、私にはただただとても深い驚きとして体験されている。

### 目次

- 1 頁：巻頭言
- 2 頁：BSR トピックス①
- 3 頁：さざえ堂だより
- 4 頁：BSR トピックス② / 今後の予定

## BSR トピックス①

## 第 6 回鴨台盆踊り報告

～仏教と言わずに仏教を伝える～

教育開発推進センター 専任講師 齋 藤 知 明

7 月 8 日（金）、9 日（土）に第 6 回鴨台盆踊りが大正大学で開催された。このイベントは 1960 年代に始まり、今の礼拝堂の所にあったグラウンドでおこなわれていた。長年途絶えていたが、2011 年に全国に先駆けた域学連携イベントとして、そしてこの年に起きた東日本大震災の物故者追悼行事として再開された。

再開当初は現在のような立派な櫓はなく、まさしく手作りの盆踊りであったが、このときから多くの方が参加していたのを覚えている。以来、盛夏の風物詩として西巣鴨地域に浸透し、徐々に規模は拡大していった。昨年は 2 日間とも雨天のため屋内での開催であったが延べ 2,000 人を集め、域学連携のイベントとして定着したといっても過言ではないだろう。

さて、地域に開かれたイベントとして成長し続ける鴨台盆踊りであるが、再開当初より授業のなかで学生自らの手によって企画・運営が進められている点に大きな特徴を持つ。さらに 2014 年度から「サービラーニング」の一科目となり、全学生の履修が可能となった（2016 年度は地域創生学部以外が履修可能）。この授業を筆者は今年度から担当したが、いかに大学／学生が地域に貢献できるか、さらにその貢献をどのようにして学びへと変換できるかを最も重視した。

そして、先にも述べたが、特筆されるのが、この授業は学部学科学年の垣根を越えて学生が集まる点だ。必然的に、各自がこれまで培ってきた知識や専門性を、盆踊りの成功という一つのミッションのために応用・実践する機会となる。そうであれば、この授業を大正大学独自の発展的共通教育として位置づけることができると考えた。

では、発展的共通教育の理念に何を据えるか。初代学長澤柳政太郎は大正大学創立当時、次のように述べている。「我が大正大学には宗教的空氣がなければならぬ。又実には大乘仏教的精神が充ち満ちていなければならぬ」と。この言葉に則り、盆踊りを単なる地域に開かれたイベントとして開

催するのではなく、大乘仏教としての「利他の精神」を来場者に伝えることができる盆踊りにしたいと考えた。また、言うまでもなく盆踊りは仏教と民俗・習俗が交わった行事である。それゆえ、利他の精神を行動に移すことによって、仏教という言葉を使わないとしても、来場者の方々に仏教系大学らしいと思われるイベントにできるよう授業を計画した。

4 月から始まる授業での最初の作業は目標設定である。今回は特に地域の方を多く呼ぼうということになり、2 日間で延べ 3,000 人を集客することを目標とした。そして、地域向けの広報を強化すると同時に、盆踊り以外でも地域の方が長く楽しめるように、地域に関する情報を活用した企画の実施、地域の方が多く座れるような座席の増設、地域の方を案内できるスタッフの配置などを学生たちは立案していった。そして利他の精神を「おもてなし」という言葉に換えることによって、来場者の方々に満足してもらえるような盆踊りにしようと誓った。

本番当日。晴天であった 8 日は今まで見たことのないほどの数の人がキャンパスに溢れかえった。特に親子連れの近隣者が多くみられ、屋台の列が絶えることはなかった。これまでで最大の来場者を数え、老若男女、あるいは学生・地域の方を問わず、数多くの方が盆踊りの輪に加わった。



一方で 9 日は朝から雨が降り、盆踊りの時刻までの企画物は屋内での開催を強いられた。9 日の地域向け学生企画「鴨台〇×クイズ」は屋内で実施することが難しく、当日午前中に教職員と幹事学生間で打ち合わせをした際は、地域の方に傘を持ってもらって櫓回りで実施しようという話になった。しかし、それを学生らに伝え、濡れている地面を見た企画担当の学生が異を唱えた。「傘を持ってクイズを実施したらこの濡れている地面では滑って転んでしまうかもしれない。おもて



〈授業の様子〉

なしを大事にするなら中止しましょう」。そこで学生らは討議し、結果、自分たちが長い時間かけて準備した企画を、自ら中止する決断をした。そして、この企画に替わり、在庫があったラムネを親子連れの子どもに限定して無償配付することになった。ここで見られたのは、学生らが自分たちで何がおもてなしか、どうすれば利他の精神を発揮できるかを模索している姿だった。

その後、夕方には幸いにも雨が上がり、2 日目も屋外で盆踊りを実施できた。盆踊りの輪は前日の 2 列から 3 列へと増え、盛り上がりの余韻を残したまま第 6 回鴨台盆踊りはフィナーレを迎えた。2 日間での来場者数は目標を大きく超えて

延べ 3,500 人。地域の風物詩としての定着段階から発展段階へとステージが上がる機運を感じた。

帰路につく地域の方々からは「年々参加しやすくなっている」「子どもが多くていいね」などの声をかけていただいた。一方で「屋台の列整理を徹底してほしい」「盆踊りの曲がわかりづらい」などの声もいただいた。このような称賛・批判を真摯に受け止めながら、今後も来場者に満足してもらえるような鴨台盆踊りを試行錯誤していきたい。その果てに「大乘仏教的精神が充ち満ちている」学風の醸成があると信じている。

## さざえ堂だより

## 蓮が開花しました

表紙の写真のとおり、さざえ堂前にある大鉢に植えられた蓮がきれいな花を咲かせました（6 月 28 日頃）。この蓮は今からおよそ 10 年前、元学長・常務理事の多田孝文先生（当時は人間学部長）のご尽力により前監事山田俊和先生より株をいただき、本学日本庭園で栽培していたものを職員有志の手により昨年度・今年度とさざえ堂前の大鉢に株分けしたものです。

蓮の原産地は仏教と同じインドで、観賞用、食用として重用されています。地下茎はいわゆるレンコンです。種子は蓮の実としてお菓子や生薬になります。葉・芽・花、これらは蓮茶として飲まれます。古くは、花托の形状を蜂の巣に見立て、「ハチス」と言っていたのが転訛して「ハス」となったようです。他にも「水芙蓉」または単に「芙蓉」、「不語仙（ふごせん）」、「水の花」等とも呼ばれます。

ご存じのとおり蓮は仏教を象徴するものとされています。仏様の台座は蓮の花です。蓮は污泥に染まらず清浄な花を咲かせます。むしろ污泥の中でないときれいな花が咲かないそうです。また蓮の葉は表面が特殊な構造をしていて水に濡れることなく、水銀のような水滴となって汚れや小さな虫、異物を絡め取る自浄機能があります。

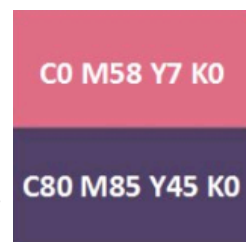
これはロータス効果と呼ばれます（カップ入りのヨーグルトで、蓋にヨーグルトがべったりと付かないものはこのロータス効果を応用したものです）。



更には蓮の花は咲くのと同時に花托に種子を抱えています。これは生きとし生けるもの全てが仏となる可能性を持っているということ、因の中に果があり、果がまた因になるという、因果同時・因果の連続性という真理を顕現していると言えます。

さざえ堂のご本尊聖観自在菩薩様も左手に蕾の蓮の花（未開敷蓮華）をお持ちです。未だ開いていない蕾は仏性（仏となる可能性）を持っていながら、欲望や煩惱に囚われたままの私たちの心です。右手でそれを開こうとしているのは、観音様の衆生救済を表しています。

大正大学では、昨年度あらためて「ユニバーシティ・カラー」を定めました。従前から校旗等で使用されている「古代紫」は、仏教では高貴な色として尊ばれており、大正大学の歴史と伝統、建学の理念「智慧と慈悲の実践」を表しています。それに蓮桃色（はすももいろ；ロータスピック）を加えました。



【ユニバーシティ・カラー】

蓮の桃色は、泥の中に咲く美しい蓮の花のように、どのような時代でも清く正しくあるべきという「未来への決意」を表しています。2 つの色で、伝統を基盤に明るい未来を目指す大正大学の教育理念を象徴しています。このようなことから大正大学の建学の精神を具象化して建てられたさざえ堂の前にて「蓮の花」が咲くことはとても意義深いことですし、その意義をしっかり伝えていかなくてはならないと感じました。（M）



## BSR トピックス② 仏前結婚式 執行

去る 6 月 29 日、大正大学礼拝堂の阿彌陀如来様のご宝前で結婚式が行われました。

新郎新婦のお二人は本学卒業の同級生で、在学中に「大学入門」という仏教を体験的に学ぶ科目の中に模擬の「仏前結婚式」を見る講義があり、非常に感銘を受けて自分たちも「仏前結婚式」を挙げたいと思っていたそうです。お二人とも本学茶道部に所属していたご縁で、現茶道部顧問の仏教学部准教授勝野隆広先生が戒師となり、天台宗の法則にのっとり、大正大学礼拝堂での挙式が執り行われました。

式には両家の親族、知人の他に「大学入門」の内容を継承した科目である「文化の探究（仏教を体験する）」の受講者約 140 名も参列しました。

宗派によって多少の違いはありますが、仏前結婚式で



は、仏様の前で、戒師より戒めを受け、結婚にあたっての誓いを申し述べます。それに念珠授与あるいは交換といった仏教的なことや神前式と同じように三三九度・親族固めの盃等も加わります。それらが、雅楽や「唄（ばい）」などの聲明（しょうみょう）の調べの中で執り行われます。

さらに今回は模擬ではなく本物の結婚式です。授業の受講者として参列した学生も、厳粛な雰囲気の中、緊張しつつも幸せそうなお二人の晴れ姿を見て、至福の時間・空間を共有し、とてもあたたかい気持ちになったのではないかと思います。（M）

## 今後の予定

7 月 16 日（土）	11 時～12 時 9 時～13 時 13 時～15 時	花会式（時宗） あさ市 お坊さんカフェ「僧話花」	鴨台観音堂前 南門 けやき広場 5 号館 1 階
8 月 20 日（土）	11 時～12 時 13 時～15 時	花会式（夏休み特別企画） お坊さんカフェ「僧話花」	鴨台観音堂前 5 号館 1 階

※8 月は「あさ市」を開催しません。



### 巻頭言執筆者 紹介

張江 洋直（はりえ ひろなお）

大正大学 心理社会学部 教授・人間科学科 学科長

東洋大学 文学部 卒業

東洋大学大学院 社会学研究科 修士課程修了（社会学修士）

同 博士課程 単位取得満期退学

千葉明德短期大学助教授、稚内北星学園大学教授 等を経て、平成 25 年より本学教授。専門は現象学と社会学を融合させた「現象学的社会学」の始祖といわれるアルフレート・シュッツを中心とした社会学理論・社会学説史。

### 巻頭写真

さざえ堂前に咲く蓮の花

